
私の幸福をあなたに

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の幸福をあなたに

【Nコード】

N6379Y

【作者名】

usa

【あらすじ】

工藤新一 工藤蘭 共に二十歳

嬉しい知らせと共に、二人の間に事件が起きる。

『だって彼女、ウザいし？キャハッ』

一人の少女が蘭を追いつめていく。

新蘭。結婚している設定です。

Happy 1

ここはとある洋風の屋敷。

一組の若い男女が、何やら話しあっていた。

「そんで、ホームズはな…」

「あーはいはい。そうですか」

瞳をキラキラとさせる青年と反対に、彼女はうんざり顔。

「もつと話しておくべきことあるでしょ」

「ん？あ、ああ…」

彼女が強い口調で言うと、彼の歯切れが悪くなる。

「でも、さすがに早いだろ…」

「だーめ！後回しにしたら、新一絶対はぐらかしちゃうから」

新一は苦り切った表情でコーヒーを飲む。

「そんな不味そうな顔したら捨てるわよ」

「じよ、冗談だつて」

カップを取り上げようとする蘭の手を、新一は慌てて止める。

「お前は、いいから座ってるよ」

「…わかりました」

蘭はそう言って、ソファに腰を下ろす。

「にしても、アイツら遅すぎだろ…」

新一は時計を見つめた。

時刻は約束の時間を一五分過ぎ、一時四五分。

「しょうがないよ。来てっていきなり言った、私達が悪いのよ」

「そうそう」

「やっぱそうなのか…」

ん？

今、一人会話に紛れ込んでいなかったか？

「…黒羽。テメエ…」

「いーだろ、別に。鍵かけてなかったそっちがわりーんだからよ」

黒羽快斗は反省した様子もなく、ソファにひっくり返る。

「やめてよ、快斗！ここ、工藤君ちだよ」

青子は快斗を窘めつつ、自分もちやつかり腰掛けている。

「不法侵入だぞ、全員」

「んな堅いこというなや、工藤。こっちは来てやったんやぞ」

服部平次は新一と肩を組み、黒い顔とは対照的な白い歯を見せる。

「せやけど、あたしらなんも言わんと、急に入ってしもたし…ごめん、蘭ちゃん」

和葉は申し訳なさそうに蘭に謝る。

「私達はいいのよ。無理言ってきたもらったんだし。今、お茶持ってくるから…」

「あ、オレが行くから、座ってろって！」

立ち上がりかけた蘭を再び座らせ、新一はキッチンへ向かう。

「なんやの、工藤君。今日はえらい優しいやん」

「そ、そう？」

和葉が不思議そうに言うと、蘭は曖昧に返す。

「こりゃ、何かあったな」

「何かって？」

ボソツとつぶやく快斗に青子はたずねたが、快斗は答えない。

「それで、工藤。何でオレらのこと呼んだんや？」

「ん？ああ…」

新一は全員の前に飲み物を出すと、ひとつ咳払いをした。

「え、えーと、オレ達はもう二十歳で、皆それぞれ結婚した…だろ？それで…まあ、その…」

どんどん歯切れが悪くなっていく新一。

蘭が急かすように小突いた。

もう一度咳払いをし、新一は言った。

「まあ…つまり、オレらにだな…」

再び言葉に詰まる。

すると、業を煮やした和葉が言った。

「苛々さんといって。男なら男らしく、はっきり言ったらどうなん？」

隣で青子が頷く。

「あ、あー…えーと…つまりそういうことだよ。ほら…」

「そんなんでわかるかい！」

「オレらは超能力者じゃねえぞ」

平次と快斗が突っ込みをいれる。

「いや…別に…その…」

「もういいわよ！私が言うから」

蘭がそう言つと、新一はようやく決心がついたようだ。

「ちょっとお前らに報告があつてよ」

蘭の肩を掴んで落ち着かせると、ゆっくりと言った。

「オレと蘭に…」

子供ができた」

本日も、工藤邸は賑やかです。

Happy 1 (後書き)

こんにちは、usaです♪

新連載です！

駄文で時々意味不明ですが、どうぞよろしくお願いします。――
――

Happy 2

新一からの衝撃の告白から数分。

ようやく客人四人は静かになりかけていた。

「ま、まあ、おかしくはあらへんもんね」
「うん。蘭ちゃん、おめでとう」

和葉と青子は真っ先に祝福の言葉を述べる。

しかし、平次と快斗は新一をからかう方で忙しいらしい。

二人はそろって新一を小突いていた。

「もう！子供なんだから」
「ほつとこ。それより蘭ちゃん、お腹触ってもええ？」
「青子も！」

二人は蘭のお腹に耳をあてた。

「まだ早いよ。一ヶ月だもん」
「でもええなあ蘭ちゃん。もうお母さんになってまうんやね……」

和葉がしんみりと言った。

「お母さんか……うらやましいな」
と、青子も言った。

「二人だってもうすぐだよ、きつと」

「そうかな…」

「うん」

そこで、チャイムの音がした。

「ちょっと出てくるな」

新一が玄関の方へ向かう。

その背中はいくらか誇らしげだった。

「工藤のヤツ、赤ん坊できたら性格変わりのつたな」

平次がぼそりと快斗に耳打ちした。

「そんなもんなのかねえ」

しかし、二人のだらけた会話もそれまでだった。

「ほら、さっさと運んで！」

「早くしなさいよ」

命令口調の声とともに、誰かが中に入ってきた。

「んなこと言っただって、重てえんだよ…」

後ろからはよろよろと大きな荷物を運ぶ、新一の姿。

そして、そのまえには鈴木園子と宮野志保。

一同は啞然としてその光景を見ていた。

「そ、園子…何なのその荷物…」

蘭が口をパクパクさせながらたずねた。

新一は近くにその箱をおくと、ため息をついた。

「何って、お祝いよ！決まってんじゃない」

園子はニヤニヤしながら、箱をあけた。

中にはシャンパンやらワインやらがふんだんに入っていた。

「久しぶりにみんな集まってることだし、パーっと盛り上がりよう！」
「もちろん、おめでたの人はジューズよ」

すっかり親友になっていた志保も、蘭に微笑みかけた。

蘭も笑顔になり、礼を言った。

「ありがとう…」

「そうそう。これ、博士からのプレゼント」

志保は同じ箱から、何やら大きな機械を取り出す。

「な、何それ？」

青子が目を点にさせた。

「自動裁縫機って聞いたわ。これから子供の服とか必要になるだろうからって。この中に布を入れればいいんですって…」
「ほー。そんなら試しに入れてみよか」

平次が面白半分に、自分のハンカチを入れた。

「やめた方が良かったと思うぜ…」
と、新一は言った。

「何でや？」

だが、答えを聞くまでもなかった。

その機械から、作動音とは別の音が聞こえてきた。

そのうち音は大きくなっていき…

「おわっ!？」

「きゃあっ!」

「…な?言つたろ?」

爆発し、見るも無残な姿となる阿笠の発明品と平次のハンカチ。

その場にいた全員が呆然とする。

「と、とにかく、今日は蘭のおめでた祝いだし、皆で飲もう!」

園子が慌てて取り繕い、グラスを配りはじめる。

志保がそれに、シャンパンを注いでいった。

ただし、蘭はジュース。

和葉と青子も遠慮した。

「それじゃ、蘭と新一君の子供の、誕生を祝して…」

乾杯、という前に、再びチャイムが鳴った。

園子は上がっていた手を下げた。

「今度は誰やる？」

「またお祝いに来た人かな？」

和葉と青子がほのぼのと言った。

思えば、このチャイムが、すべての悪夢の始まりだった。

Happy 3

新一は三度目のチャイムも怪しむことなく玄関をあけた。

「はい？」

「あ、あの…こんにちは」

新一はキョトンとした。

目の前には、高校生ぐらいの少女と、弟らしき小学一年生ぐらいの男の子がいる。

「今日向かいに越してきた、沢田っていいです。えっと、今は両親は出かけてていないんですけど…私は、娘の明輝^{あき}で、これは弟の明^あ矢^{きや}です」

明輝はぎこちなく愛想笑いを作る。

「あ、ああ、どうも…」

「これ、つまらないものなんですけど、どうぞ」

明輝は何やら小さな紙袋を差し出した。

「私と母が作ったケーキです。良かったら、食べて下さい」
「ありがとうございます」

戸惑いながらも、新一はそれを受け取った。

「お兄ちゃん、どっかで見たことあるー！」

突如、明矢が新一を指差した。

「コラ！明矢！」

「いや、大丈夫ですよ」

ものすごい剣幕で明矢を怒鳴った明輝を、新一は慌てて止めた。

「すみません…」

明輝は謝ると、明矢を捕まえて無理矢理頭を下げさせた。

「痛いよお」

「人を指差しちゃいけないの！年上の人には敬語を使うの！」

「…はい」

明矢は納得のいかなそうな顔で言った。

「どうしたの？」

蘭が出てきて、キョトンとして姉弟を見つめた。

「ああ…向かいに越してきたんだってよ」

新一は説明すると、二人を紹介した。

「へえ。姉弟？」

「そうです」

明輝はうなずいた。

「なんか…コナン君思い出さない？」

蘭が笑って新一に言うと、新一は少しガクつとする。

「コナンならここにいるぜ…」

「ぜーんぜん、可愛くない奴ならね！」

「あの、突然すみませんでした！もう帰りますから」

明輝は落ち着きのない明矢の腕を掴んだ。

明矢は姉の腕から逃れようともがいている。

「仲いいんですね」

蘭が微笑むと、明輝は苦笑した。

「年が離れてるんで…」

「おいくつなんですか？」

「七歳です」

「いえ、明輝さんは…」

すると、明輝は柔らかく微笑んだ。

「明輝でいいです。私はこれでも二十歳。大学二年生。よく高校生ぐらいに間違われるんだけど…」

蘭は驚いたような顔をする。

「じゃあ同い年だ！」

「本当！？わあ、良かった！近くに同じ年の人がいて」

目を皿のようにして笑う明輝。

蘭も笑い返した。

「良かったら、上がっていかない？ちょうど友達と集まってるの。
皆二十歳の大学生」

「いいの？あ、でも…」

明輝は明矢の方を見た。

「この子もいるから、やっぱり遠慮するね」

明矢は目をまん丸にさせた。

「お姉ちゃん、なんでそんな悲しそうなの？」

「なんでもないよ。お姉ちゃん、超元気！」

明輝は明矢を撫でて、笑顔をつくった。

「らーん、主役がないんじゃないわよ！」

「ごめん、園子。今行く！」

窓から顔を出した園子に向かって、蘭は叫んだ。

「今日はちょっとパーティーやってるの。人数は多い方が盛り上がるし、皆いい人だから」

中からは明るい声が時折聞こえてくる。

明輝は窓と明矢を交互に見つめた。

しかし、やはり少しでも同年代の蘭達といたいのか、笑って頷いた。

Happy 3 (後書き)

パソコンが直ったので更新♪

次回もよろしくです> (´ー`) <

Happy 4

しばらくの間、明輝は他の女子たちと盛り上がっていた。

「へえ。帝丹大学だったの？じゃあ一緒だったんだ」

「本当？私、看護学科にいるの」

「私は法学部だよ」

偶然にも大学まで同じだったと気づき、蘭と手を取り合って喜ぶ。

「看護ってことは、ナース志望？」

園子がたずねると、明輝は恥ずかしそうに言った。

「一応ね。私長女だし、明矢もまだちっちゃいから、これから先両親の面倒見なくちゃいけないでしょ？だから、絶対に何が何でもなくならない職業に就きたいと思ってさ」

「しっかりもんやね。あたしとは大違いや」

和葉が情けなそうに言う。

「でも私の場合、動機が単純すぎるもん。…ところで、今日ってなんのお祝い？」

「あ…それはね…」

青子が言いかけそうになった所を、園子と志保が止めた。

「えっ？何々？」

明輝は不思議そうに二人を見た。

「何でもないわ。気にしないでちょうだい」

志保はクールに言い返すと、青子に囁いた。

「彼女は、まだ工藤君が蘭と結婚してるって知らないのよ？」

「あ…そっか」

「もう少し黙っていきましょう」

青子はこくつと頷いた。

「ねえ、ここにいる男の子達って、皆の彼氏？」

そんな会話にも気付かず、明輝は無邪気に聞いた。

新一達は、明矢のヒーローごっこに付き合わされている。

蘭と和葉と青子は、一斉に頬を赤らめた。

「ま、まあ…そんなもんかな」

「近いかもしれへんね」

「うん…」

まさか夫婦だともいえず、曖昧に答える。

「あの三人、どっかで見たことあるなあ…」

明輝は呟くと、考えこんだ。

「もしかして、芸能人？」

「ちゃうよ！あんな色黒男、売れへんもん」

和葉が笑い飛ばすと、青子も快斗を見た。

「あんなバカイトが、芸能人になれるわけないし」

すると、園子も頷いた。

「あの推理オタクも同じね」

「大馬鹿推理之介よ」

蘭が訂正すると、明輝は笑った。

「面白い人たち。好きなのに、言ってることが無茶苦茶だもん」
「そうかなあ？」

青子は首をかしげた。

「顔に書いてある。大好き、って」

その言葉に、再び三人は真っ赤になる。

「か、からかわんというて」

和葉がツンとしていった。

「そ、そういう明輝ちゃんは、彼氏とかいないの？」
「え？私？」

明輝は自分を指差した。

「ん〜。あんま考えたことないや。今まで家のことで色々忙しかったし」

「でも好きな人とかはいるんじゃないの？」

園子がニヤニヤとして聞いた。

明輝の顔色が、一瞬だけ変わった。

「う〜ん。憧れの人だったら、いるよ」

「へー。どんな人なん？」

和葉が興味心身にたずねる。

「んつとねえ、キラキラしててえ、クールに見えるんだけど、ちよつぴり子供っぽいところが可愛くってえ、見た目とは違う、あつつい人！」

少し照れたように、明輝は言った。

「それ、憧れじゃなくて、マジなんじゃないの〜？」

「やだ、違うよ」

「どうかしらん」

赤くなる明輝を、園子は小突いた。

どこから見ても、普通の恋をする普通の子。

だが、志保だけが彼女を鋭い瞳で見つめていた。

まるで、彼女の化けの皮を見抜こうかとするように……。

Happy 5

次の日の大学でのこと。

蘭は、休学届を出していた。

初めての出産に向けて、これから家で大人しく準備を進める予定だ。

しかし、心細くはない。

子供が産まれるまで、和葉と平次は定期的にこちらを訪れる予定であり、ここ一週間は泊まることになっている。

園子や志保はもちろん、青子や快斗もしょっちゅう遊びに来ている。

そしていつでも、新一がいる。

問題なのは、彼の仕事の方だが…。

「出産予定日は、大体五月の初め、つてところね…」

大学の近くにあるカフェで、志保は呟いた。

現在医学部に在籍している彼女は、蘭の身体の様子をよく見てくれていた。

「新一君と同じ誕生日になっちゃったりして」

園子がそう言って笑った。

「それならもう忘れないよね」

蘭も笑い返す。

右手をそっとお腹にやる。

ここにもう一つ命があるのだ。

まだ動きもしないほど小さいが、こうしていると、心がホッと温かくなる。

そんな蘭を、園子と志保が、優しい眼差しで見つめていた。

「あっ、いた！蘭ちゃん！」

後ろから突然、笑顔の少女が登場。

「明輝ちゃん」

「えへへ、探しちゃった」

明輝はそう言って、空いていた席に腰かけた。

「どうかしたの？」

園子が急いでいた様子の明輝を見て、不思議そうに言った。

「ううん。私、まだこの辺の地理に詳しくないから…いっしょに帰れないかな、なんて」

「いいよ。あ、でも私スーパー寄ってかなきゃ…」

蘭は困ったように言ったが、逆に明輝は目を輝かせた。

「その方が私もいい！今日も両親遅いから、夕飯作んなきゃいけないんだ」

「じゃあ、もう少し経ったら帰ろっか」

蘭はふと時計を見た。

「あともう少しで来る予定なんだけど…」

「え？誰が？」

すると、今まで黙っていた志保が冷たく言った。

「あなたには関係のない人よ」

「ちよつと志保。もう少し柔らかい言葉で言いなさいよ」

園子が窘めたが、志保はすましてコーヒーを啜っている。

「き、気にしないで。もうすぐ来るっていうのは、新一のこと」

蘭が慌てて言うと、明輝は声をひそめてたずねた。

「ね…その新一君って、あの工藤新一君のこと？」

「そ、そうだけど…」

何故かいつもと違うような明輝に、蘭は動揺しつつも答える。

ところが、明輝の方はパツと笑顔になった。

「わぁ！私ファンなんだ！ご近所だなんて、夢みたい！」

気のせいだったのかと、蘭も笑う。

「本当？」

「うんうん、本当！」

明輝は大きく頷くと、三人を見た。

「ねえ、皆はさ、運命って、信じてる？」

「え？」

「私は信じてるよ…。運命の相手…とか」

そう言った明輝の笑みが、どこか怪しかったことに、やはり志保だけ気付いた。

Happy 6

今日の食卓は、何故だか人が多い。

えーと、ひい、ふう、みい…

「つて、おい！」

「なんだよ、うるせえな」

大声を出した新一に向かって、快斗は顔をしかめてみせた。

「どうしたの、工藤君？」

青子もキョトンとしてみている。

「何でお前らまでいんだよ…」

「何でつて…志保ちゃんに呼ばれたからさ」

快斗に言われ、新一は志保の方を見た。

ところが、志保は気にも留めない様子。

「いいじゃない。大勢のほう楽しいよ」

蘭と和葉がキッチンから料理を運んでくる。

「おっ、美味そうやな」

平次が覗き込んだ。

すると腹が鳴り、平次は笑って誤魔化した。

「蘭ちゃん料理上手ね」

明輝が明矢と共に椅子に腰かけて、料理を眺めていた。

「明矢、美味しそうだね」
「うん！」

明矢が大きく頷くのを見て、蘭は恥ずかしそうに笑った。

「そんなことないよ。全部和葉ちゃんに手伝ってもらったし」
「あたしはほとんど何もしてへんもん。蘭ちゃんが一人でやったんとおんなじや」

和葉がそう言っていると、平次が頬づえをついた。

「そらそうや。和葉がこないな料理、作れるわけないわ」
「なんやて!？」

喧嘩腰の二人をなだめようと、園子が言った。

「はいはい、仲が良いのはわかったから、ご飯にしよう」

園子の手には、二本の瓶がある。

「また飲むの、園子……」
と、蘭が呆れ声を出す。

「パーティーはもう終わったよ」

青子が窘めるように言ったが、園子は笑って言った。

「おめでたいことがあった時は、三日ぐらいは飲み続けなきゃね！」
「オヤジじゃねえんだから、程々にしとけよ」

新一も言っではみたが、すでに園子は全員分のグラスを出している。

「蘭と明矢君は、ジューズね」

「え？蘭ちゃん、お酒ダメなの？」

明輝が意外そうに聞いた。

「今はちよつと控えてるの」

「実際はすごいわよ」。多分、一升瓶は丸ごと飲めるわね」

「園子！」

一滴も飲んでいないのに、蘭は顔を赤くさせた。

「いいからいいから。さ、食べようよ！」

計十人は、それぞれ座りはじめた。

これだけの人数分の椅子があるとは、逆に驚きである。

志保がグラスを配り、園子がシャンパンを注ぎはじめた。

明矢は落ち着きなく料理を見ている。

「おいおい、そんながつつくなよ」

快斗が明矢を見ていった。

「おなか減ったー」

「空腹なんか忘れさせてやるよ。ほら、よく見てろよ……」

快斗が明矢にマジックを見せている間に、全員に飲み物が渡った。

「すごい。本当にパーティーみたい」

明輝が蘭に囁いた。

「それじゃ、今日のお祝いは、明輝ちゃんと、明矢君の歓迎と……」

園子がグラスを持ち上げた。

「蘭の子供の、健康を願って!!」

一人グラスを高く掲げる。

「……あれ?どしたの?」

他の誰も反応しないことに、園子は戸惑った。

「……ねえ」

明輝が口を開いた。

「今の、どういう意味？」

「…あ」

しまったという声を漏らす園子。

それとともに、明輝のグラスが、静かに床に落ちた。

Happy 7

「た、大変！」

「動かんといて」

青子と和葉が、床に散らばったガラスを拾い集める。

「あ、あのね、明輝ちゃん。言いそびれてたんだけど…」

蘭が俯く明輝に向かって言った。

「私と新一は…」

「やだなあ、もう！最初に言ってくれば良かったのに」

明輝は顔をあげると、笑顔を見せた。

「おめでとう、蘭ちゃん！」

「あ、う、うん。ありがと…」

いきなり手を握られ、蘭は戸惑いつつも笑い返した。

「思ったより物分かりがいいみたいね」

志保が園子に囁いた。

「良かったじゃん。言ってみてさ」

「…どうかしらね」

その間も、明輝は早口に話していた。

「うわあ、いいなあ、すごい！ねえ、お腹触ってもいい？」
「い、いいけど…」

やけにハイテンションな彼女に、蘭も困惑した表情。

「ここに、赤ちゃんがいるってことでしょ…？」

蘭のお腹に耳を押し当て、小さな声で言った。

「何だか不思議…。心があつたかくなってくるね」

目をつぶり、まるでそこにいる子供と会話をしているかのように、
明輝は穏やかな顔になる。

「明輝ちゃん…？」

全く動かなくなった明輝を心配し、青子が声をかけた。

すると明輝は目を開け、蘭からも離れた。

「ホントに、おめでとう！」

「何がおめでとうなの？」

明矢がキョトンとしてたずねた。

和葉が屈んで、明矢の目線に合わせた。

「あんな、蘭ちゃんのお腹には、赤ちゃんがおるんやで」

「赤ちゃん？」

明矢が蘭を見つめ、首をかしげた。

「そうよ。産まれたら、一緒に遊んであげてね」

「うん、いいよ！」

和やかな雰囲気の子供たちを見ながら、平次は新一に耳打ちした。

「ええんか、工藤？」

「何がだよ」

「このままにしておいたら、お前んとこの学校、えらい騒ぎになる
んとちゃうか？」

新一はため息をついた。

「かもしんねえけど…ばれちまったもんは、しょうがねえだろ」

「そうそう。念のため、明輝ちゃんには口止めしとくけどさ」

快斗がそう言っつて、新一に向かってニツと笑う。

その時、どこから携帯の音が聞こえてきた。

「あ…ごめん、私の」

明輝は慌てて携帯を手にとった。

「もしもし、ママ？え？もう家？……………うん、わかった。今帰るか
ら」

電話を切ると、明輝は明矢の手をとった。

「ごめん。もう帰んなきゃ」

「また遊びに来てね」

蘭が手をふると、明輝もふり返した。

「今度は、蘭ちゃんの彼氏にも会わせてねー！」

「…えっ？」

蘭は振っていた手を止めた。

「今の、どういうことなん？」

和葉が目点をさせた。

「完璧に誤解しているようね、彼女…」

志保が横目で園子を見た。

「あなたのせいで」

「…ごめん」

そんな会話にも気付かぬまま、明輝と明矢は出ていった。

Happy 8

その後、工藤邸では緊急会議が行われていた。

「で、どうするのよ？彼女、子供の父親が工藤くんだって、理解してないわよ？」

志保が頬杖をついた。

「どうするもこうするも、説明するしかねえだろ」と、快斗が言うが、すかさず和葉が反論した。

「でも、明輝ちゃんがもしも大学に言ったら、ヤバイやろ？もしかしたら、二人とも退学になってまうかも……」

「そこまではせんでも、まあ、呼び出しくらって、停学……ぐらいはありえるかもしれへんな」

平次は腕を組んだ。

「いつそのこと、蘭ちゃんはシングルマザーだ、って通しちゃえば？」

青子が言った。

「別れた彼氏との子供なんだ、とか言って」

「それでその元彼の所に行こう！とか言い出したらどうすんのよ？あの子のことだし、何言いだすかわかんないわよ」

園子が手を振って否定した。

「じゃあどうしろっちゅうねん!？」

「それを今考えてんでしょ！」

「お、落ち着いてよ、二人とも…」

睨みあう平次と園子に、蘭が割ってはいる。

「明日、明輝ちゃんには私から話すから。変に誤解されてたらやだし」

「そうだね…。蘭ちゃんがそう言うなら、青子は賛成！」

青子はニコツと笑った。

「それで良いんじゃないか？」

「せやな。ねえちゃんの思った通りにやるのがええやろ」

快斗と平次も頷いた。

「もちろん、私達も反対しないわよ！」

と、園子が和葉と志保の肩を抱きながら言った。

「んで？肝心の父親の方はどうなのよ？」

園子の一言で、今まで全く口を開かなかった新一に、視線が注がれる。

「あ…まあ、オレは良いと思うぜ」

新一は慌てて答えた。

少し様子がいつもと違ったが、誰も何も言わなかった。

「それじゃ、決定！ま、明輝ちゃんには気の毒だけど、ちゃんとして事実を認めてもらわなくっちゃね」

「気の毒って…何でなん？」

和葉がキョトンとしてたずねた。

「この間、彼女が言ってたのよ。工藤新一のファンなんだ、ってね」
「へえ」

平次は黙りこくっている新一の肩を叩いた。

「おい。どないした、工藤？」

「ボーっとして…何考えてんだよ」

声をかけた平次と快斗に、新一は体をびくりと震わせた。

「な、なんでもねえよ」

「…なんか、怪しいな」

「オレらに隠し事しとるんとちゃうか？」

二人の疑いの籠った目に、新一はたじろぐ。

しかし、すぐに目を逸らしてもう一度、何でもない、と言った。

「お前、嘘つくの下手なやつだなあ」

「はあ！？」

「そないな顔したら、すぐに姉ちゃんにもばれるで？」

新一は蘭を見た。

今は楽しげに笑っている。

だが、新一はなぜか表情を曇らせる。

「なんか…嫌な予感がすんだよ。これから何かが起きるような…」
「不吉なこと言っなあ、お前…」

快斗は呆れた目をしたが、新一は至って真面目な顔をしている。

「ただの予感で終われば、良いんだけどな…」

その重たい一言に、平次も快斗も何も言えなくなった。

Happy 9

帝丹大学前の、小さなカフェの中。

自動ドアが開く音がする。

蘭は振り返った。

これでもう五回目。

しかし、待っている人物はなかなか来ない。

思わず時計を見やる。

一時四五分。

確か、約束の時間は三十分だったはず。

まさか、忘れているとか…。

考えを働かせることに夢中になっていた蘭は、突然うしろから肩を叩かれ、体全体をびくりとさせた。

「あ、明輝ちゃん」

「ご、ごめん、遅くなって…。なんか考えてた？すごくびっくりしてるけど…」

明輝は目を丸くさせて、蘭を見た。

「う、うん。何でもない。こっちこそごめんね。急に呼び出した
りして」

「大丈夫！私は結構、嬉しかったからさ」

明輝はニコツと笑って、向かいの席に腰かけた。

「あゝ。のど渴いたっ。授業は退屈だし、抜けるに抜けられないし
でさ。なんか頼もうよ。すいませーん！」

蘭の返事を待つことなく、明輝は手をあげて、店員を呼んだ。

「私、アップルティー！蘭ちゃんは？」

「えっと…じゃあ、コーヒー」

すると、明輝はなぜかダメ！と叫んだ。

「いい、蘭ちゃん。今はカフェイン摂っちゃダメだよ？大事な体
なんだし、気をつけなきゃ！あ、この人には、オレンジジュースを」

てきばきと注文を済ませる明輝を、蘭はポカンとして見つめた。

「何？」

「あつ。ごめん、つい…。なんか明輝ちゃん、お母さんみたいだね」

明輝は吹き出した。

「あははっ。よく言われる！ほら、明矢が産まれる前とか、うちの
ことやってたのって、ほとんど私だったからさ。自然となれちゃっ
たっていうか…」

「でも頼りになるもん。ありがとっ、明輝ちゃん」

蘭の言葉に、明輝は微笑んだ。

「これぐらいどうってことないよ！だって私、もうすぐ看護師になるんだよ？蘭ちゃんたちの健康管理は任せて！」

「じゃあ、志保と組んだら最強ね」

「そう？あ、志保ちゃんて、医学部なんでしょ？格好良いよね」

穏やかな世間話をする中、蘭は迷っていた。

どう話を切り出そう。

いきなり言うのも、気が引ける…。

「それでさ…。…蘭ちゃん？」

「へっ？あ、な、なんだっけ？」

慌てて笑顔を作って聞くが、明輝は真面目な顔になった。

「そう言えば、話があったんだよね？私ってば一人でベラベラと…」

「いいの。あの、それでね…」

蘭が話したそうとすると、明輝はそれを制した。

「大丈夫よ。私、誰にも話してないから。明矢にも口止めしてあるし」

「そ、そう…」

「まあ、大学側としちゃあ、聞こえが悪いからね。自分の学校の生徒が妊娠してる…なんてさ」

そう言ってから、明輝はハッとして蘭を見た。

「ごっ、ごめん！別に私、悪く言ってるつもりじゃ…」

「わかってるよ。平気」

蘭がそう言つと、明輝はホッとしたように頬を緩めた。

「でも、明輝ちゃん。私が言いたかったのは、新一のことで…」
「それぐらいわかってるよ」

再び話を遮り、明輝は頬杖をついた。

「なんかおかしいと思ってたんだ。二人の雰囲気、他の子たちと違つてたからさ…」

そつ明輝が言つと、蘭は安心した。

なんだ、ちゃんと知ってたのか。

大慌てして損した…。

「つまり、兄妹でしょ？」

「…え？」

「蘭ちゃんと、工藤君。だよね？」

「え、えつと…」

蘭が混乱して口をきけないでいると、明輝は早口にまくしたてた。

「やっぱそうよねえ！一緒に暮らしてるっばいし、名字も同じだし。」

最初は絶対彼女かと思ったけど、なんか違うな、って思ってたのよ！」

ええ、確かに彼女ではありません。

なぜなら妻だから！

一人で納得して頷いている明輝に、その一言が言えない。

「ち、違うの、明輝ちゃん！新一と私は…」

「ん？でも二人は同じ年だから…あーっ！わかった！血がつながってないとか？親の再婚で兄妹になっちゃった、って感じでしょ？当たり？」

ブブブー。

はっずれ。

…とも言えず。

「あ、あの…。まあ…え」と…

「それで父親代わりになってるってところかな。うん。我ながら良い推理だわ。私、探偵になれるかも！ね、そしたら工藤君の助手とかなれる？今度聞いてみて！」

もはやそつだと信じ切っている明輝に、蘭は何も言う気がしなくなつた。

「どうしたの？あつ。具合悪い？そつだよ、ね、妊婦を長く待たせてた私も馬鹿だわ…。家まで送ってくよ。立って」

黙ってしまった蘭を見て、明旗は別の意味に解釈したらしく、まだ一口も飲んでいない飲み物にお金を払ってカフェを出た。

「ごめんね、蘭ちゃん」

「だ、大丈夫。なんともないから…」

「ほんと？良かったあ」

屈託のない笑顔を見せる明輝に、蘭もつられて笑った。

人の話を聞かないことが難だが、決して悪い子ではない。

現に、自分の身体をこんなにも心配してくれている。

新一のことは、また時間を見つけてゆっくりと話そう。

呑気にそう考えていた蘭に、明輝は言った。

「ねえ蘭ちゃん」

「何？」

「突然だけどさ…」

視線がぶつかりあう。

「工藤君、私が貰ってもいい？」

Happy 9 (後書き)

明輝ちゃんの勘違いは続く… (汗)

次回もよろしくです> (――) <

当然のことながら、蘭はしばらくの間、呆然と明輝を見ていた。

「いいでしょ？ね？」

「そ、それは…」

「だって兄妹だよ？彼女じゃないんでしょ？私、本当に工藤君が好きなんだ。憧れとかじゃない。本気なの！」

明輝の真剣な目から、顔を逸らすことができない。

ダメと言えたら、どんなにいいだろう。

しかし、それはできなかった。

おなかの中にいる、子供のためにも。

「わ、私と言えることじゃないから…。ごめん」

そう言うのが、精一杯だった。

明輝は少し落ち着きを取り戻すと、深く息を吐いた。

「そうだね…。変なこと言っちゃって、ごめんね」

「ううん。いいの」

「でも、諦めないよ、私」

明輝は、まっすぐに蘭を見た。

「蘭ちゃんは、応援してくれる?」

再び返事に困っていると、明輝は笑った。

「そんな顔しないでよ!何も蘭ちゃんに、工藤君から離れろって言うてるわけじゃないんだしさ」

「う、うん…」

「それでもさ、友だちなら、頑張っってって言うてくれるよね?」
「…うん」

蘭が小さく頷くと、明輝は嬉しそうに蘭の手を握った。

「ありがとう!蘭ちゃんが一緒なら百人力、ううん。一万人力!」

その眩しいぐらいの笑顔に、蘭は心苦しさを覚える。

いつか、彼女の涙を見ることになるかもしれない。

泣かせるのは、この私だ。

蘭から話を聞き終えると、園子が勢いよく立ちあがった。

「私が話つけてくるわ」

「ス、ストップ！」

まるで殴りこみにいくかのような形相に、蘭は慌てて園子を止める。

「蘭！早くしないと、新一君、本当に明輝ちゃんに取られちゃうよ？」

「うん…」

「善は急げ！行くわよ！」

「だから待つてよ」

蘭は園子と共に椅子に座ると言った。

「言わないでおきたいの」

「…彼女に？」

志保が無表情で聞いてきた。

「だって、なんだか…辛いと思うの。好きな人が、別の誰かと結婚してるなんて。私だったら絶対に嫌」

「そんなこと言ったって、それが事実ならしょうがないよ」

園子が不服そうに言った。

「確かにそうなんだけど…でも、嫌なの」

頑と言い張る蘭に、園子は何か言おうとしたが、そのまえに志保が口を開いた。

「あなたが決めたことなら良いんじゃない？私は何も言わないわ」

それを聞くと、園子も口を閉ざした。

「ま、彼は反対でしょうけど」
「彼？」

園子が聞き返すと、志保は頬杖をつきながら言った。

「工藤君よ。彼ならきつと、蘭は自分のものだって堂々と言い張りたいって感じてでしょうし」

「ありうるわね」

二人が頷くのを見て、蘭は苦笑した。

「それはないと思うけど……」

「甘いわね、蘭」

園子がニヤニヤとした。

「あの男は、独占欲の塊みたいなもんよ」

志保も微かに口角をあげた。

「見ていて面白いとは思うけどね」

そう言うてから、ふと時計に目をやる。

「私、次の講義はじまるから行くわ」

「うん。…志保」

教室に向かおうとする志保を、蘭は呼びとめた。

「ありがとう。ホントに」

「…馬鹿ね」

志保は言った。

「あなたがそう言ったから、私は賛成しただけ。何もしてないわよ」

志保は少し微笑むと、歩き出した。

「…私も一応味方ですけど？」

園子は、少し不満気な顔をした。

「はいはい。ありがとう、園子」

「いえいえ、それほどでもあるわよん」

蘭はクスツと笑った。

嫌な予感がする。

志保は教室に向かいながら、眉間に皺を寄せていた。

本当に、これですべてが解決してくれるのだろうか…。

Happy 11

その次の日のこと。

朝から工藤邸に、チャイムの音が響き渡った。

「何や、朝っぱらから…」

平次が欠伸をしながら出てくる後ろで、和葉も目をこすった。

「誰なん？一体…」

「ちよつと出てくるね」

蘭はそう言って、玄関を開けた。

「はい？」

「おはよ！」

明輝は満面の笑みを見せた。

「お、おはよう…。どうしたの、こんな早くから」

「花嫁修業よ！」

「…はあ？」

蘭が混乱した表情をしていると、明輝は勢いこんで言った。

「今日から、私ここで修行することにしたの！ほら、工藤君って有名だから、お嫁さんもちゃんとしてなきゃじゃん？」

その言葉に、思わず蘭はぐさつときた。

それを誤魔化すように蘭は笑顔を浮かべる。

「でも新一なら、まだ寝てるから…」

「それなら私が起こす！」

明輝は気合十分に言うど、ずかずかと上がり込んだ。

「あ、明輝ちゃん？どないしたん？」

「和葉ちゃん、私ね、工藤くんのお嫁さんになるための、修行中なの！」

「えっ？」

和葉は驚いたように蘭を見た。

蘭は困ったように見返した。

「工藤の嫁？って言ったか」

平次はすっかり眠気も覚めた様子でたずねた。

「そうよ！」

明輝は自信満々に答える。

すると、平次は爆笑した。

「そらねえちゃん、無理や、無理！」

「何でしょう？」

「工藤はな、もうすでにかみ…」

和葉が咄嗟に、平次の横っ腹を殴る。

「いったいわ、ボケ！何すんねん！？」

「ちよつとアンタは黙っとき！」

明輝は不思議そうに平次を見た。

「かみ？何、それ？」

「な、何でもない！気にせんというて」

和葉が慌てて言うつと、明輝はまだ怪訝そうな顔で二人を見ながらも頷いた。

「で、工藤くんのお部屋は？」

「う、上…」

「お邪魔しまーす」

階段を勝手に上がっていく明輝。

「あつ、明輝ちゃん！？」

蘭も急いで追いかける。

しかし、突然明輝は止まった。

今度はどうしたのかと、蘭は明輝の前方を見た。

「おはよう！工藤くん」

「あ、ああ…」

新一は困惑した目で明輝を見たあと、視線を蘭に移した。

蘭がどう言おうかと迷っていると、明輝が口を開いた。

「朝ごはんはトースト？それともご飯？」

「え？あ…ト、トースト…？」

明輝はニコツと笑うと、下におりた。

「おい、何なんだよ、急に」

「しばらく話合わせて。お願い！」

「はあ！？」

蘭に手を合わせられ、新一は余計に戸惑う。

「何があつたんだよ？」

「わけはあと！とりあえず来て！」

そう言つて、蘭は新一の手を引っ張り階段をおりる。

階段の脇に、和葉が立っていた。

蘭と新一を見て、キッチンに目を向けた。

「明輝ちゃん…朝ごはん用意するって言ってるけど」

「何でアイツが」

「わかった。新一はさっさと着替えて！」

蘭は新一を黙らせると、有無を言わさぬ口調で新一を洗面台へ追いやる。

「どないする気なん、蘭ちゃん…」

「どうもしないよ」

困り顔の和葉に、蘭は力強く言った。

「だって、新一のことが好きなのは、私も明輝ちゃんも一緒なんだもん」

Happy 12

次の日も、そのまた次の日も、明輝は工藤邸を訪れた。

「はぁーい。明輝ちゃん特製、ビーフシチューだよーん」

今日も明輝は、小さな顔に満面の笑みを浮かべてやってきた。

「明輝ちゃん、ホンマに料理上手なんやね」

和葉が皿の中身を覗きこんで言った。

「親が忙しいからさ。よく明矢に作ってたの」

明輝はそう言って、サラダの入ったボウルを真ん中に置く。

「別に毎日作ってくれなくても…」

蘭は戸惑ったように言うが、明輝は笑って答える。

「ダメダメ！これは私の修行なんだから。それに、おめでたの人は、ジツとしてなきゃね！」

「でも、少しぐらい動いても平気よ」

そう蘭が言つと、隣に腰かけていた志保が言った。

「そうね。運動もせずに座っているだけなら、逆に危険なケースに陥る可能性もあるし。いつもの自分と同じことをしている方が、精

神的にも安定するわ」

「んで…」

新一が口を開いた。

「何でまたお前がいんだよ？」

「あら、悪い？良いでしょ。博士、今いないんだから」

志保はツンとして言った。

「だからって、毎晩ここ来て飯くうことは…」

「はいはい、喧嘩はいけません！料理が不味くなっちゃう」

二人を裂くかのように、明輝は二人の間にパンをおいた。

新一はまだ何か言いたげな顔をしていたが、その前に誰かに服を引っ張られた。

「お兄ちゃん。仮面ヤイバーごっこ！」

「げ…。い、今か？」

明矢はこくと頷く。

「もう飯の時間や。我慢しい」

平次がそう言つて明矢を座らせようとしたが、明矢はそんな気はさらさらないらしい。

「出たな、怪人め！退治してやる〜！」

「おわっ！？座れって！」

新一は明矢の襟首を掴んだ。

それでも明矢は遊びたいらしく、暴れて逃げようとしている。

「明矢！言うこと聞かないんなら、お家でお留守番よ」

様子を見た明輝が、明矢に向かって怒鳴った。

「やだ！パパもママもいないもん！」

「それなら、お兄ちゃん達に迷惑かけないの！」

「遊びたい！やーだあゝ！」

終いに、明矢は泣きだした。

「泣かないの！男の子でしょ！」

「だって…」

「そんな泣き虫、お姉ちゃん知らないぞ！お家からポイって出しちゃうから」

それを聞くと、更に明矢は泣き声をあげる。

「明矢！」

「ま、まあまあ、明輝ちゃん」

蘭は明輝をなだめようと、肩に手をおいた。

「そんなに怒らなくても…」

「ダメよ。怒る時は、ちゃんと怒らなくちゃ」

「でもそこまで…」

「それじゃ、良い母親になんかなれないよ、蘭ちゃん!？」

突然、明輝は蘭に向かって叫んだ。

「闇雲に愛情を注ぐだけじゃ、子供は育たないの。そんなこともわかんないの!？」

「あ、明輝ちゃん。もうやめよ。蘭ちゃんは何も、悪くないよ」

和葉がそう言うと、明輝は落ち着きを取り戻した。

「…ごめん。ついカツとなっちゃって…」

しゃくりをあげている、明矢にも目を向ける。

「いつまで泣いてるつもり？」

「うえ…」

明輝が再び怒鳴り出しそうに見えたのか、新一が慌てて明矢に言った。

「よ、よし。明矢、飯食ったら、遊ぼうぜ。な？」

「せ、せや!腹いっぱいになったら、好きなだけ遊べんで」

平次が横から付け足すと、明矢はまだ赤い目で二人を見てから、うん、と言った。

「そんなら、食べよ!せっかくの料理、冷めてまうし」

「そうだね。ほら、皆も座って」

和葉と蘭の言葉で、全員が静かに椅子に座りはじめた。

「明矢君。遊ぶのも良いけど、まずはご飯よ。ね？」
「はあい」

志保に手を引かれ、明矢は椅子によじ登った。

「ありがとね、工藤くん」
「あん？」

明輝は新一に微笑んだ。

「私、明矢にしょっちゅう怒鳴ってるから、つい…。工藤くんのお陰で、ちよつと歯止めがついた」
「いや…大したことはしてねえよ」

新一は照れを誤魔化すように頬をかく。

「工藤くんはさ、きつといいお父さんになれるよ」
「そ…そうか？」

新一は、ふと蘭の方を見た。

「蘭？」

箸の進まない蘭に、新一は声をかける。

「顔色わりいけど…どうかしたのか？」
「あ…う、ううん。何でもない」

蘭は首を振ったが、その顔にはいつもの笑顔はない。

「具合が悪いなら、病院に行った方がいいよ？」
と、明輝が言ったが、蘭は平気だと言う。

「あとで私が診るわ」

「大丈夫。ありがとう」

志保の申し出にも蘭は頷かず、無理矢理料理を口に運んでいる。

「あつ。これ美味しいね！皆も食べなよ」

その後、会話もなく食事が進む。

新一は途中、何度か蘭に目を向けたが、やはり顔色が優れない。

やがて食事が終わり、明輝が皿を片づけようと立ち上がった。

「あ、私も手伝うよ」

「いいよ。座ってて」

「ううん。本当に大丈夫だから」

そう言つて蘭は、ゆっくりキッチンに行った。

「お兄ちゃん！約束でしょ？遊ばし！」

「ハイハイ……」

新一と平次は、明矢に手を引っ張られて渋々と立ち上がった。

「それじゃ、私も帰るわね」

と、志保も工藤邸を出ようとした。

和葉も明輝と蘭を手伝おうと立ち上がる。

その時…。

がたつと音がして、全員が振り返った。

「蘭!？」

「蘭!？」

全員が慌てて蘭のもとへ駆け寄った。

「どないしたんや？」

「蘭ちゃん、しっかり!」

平次と和葉が、蘭の身体を上半身だけ起こした。

蘭が苦しそうに顔をゆがめた。

「どいて!」

志保が鋭く声をあげる。

二人に蘭を横たわらせるように言うと、志保はペンライトを取り出した。

「大丈夫よ。誰か、救急車を呼んで!」

素早く蘭の容態を見る。

「どうだ、宮野…」

「青酸系の毒物ね。でも、致死量には至ってないから、すぐに治療すれば助かるわ」

新一の問いかけに、志保は小さく答えた。

「ど、どうして…」

明輝が声を漏らした。

顔が青ざめている。

明矢が隣でキョトンとしているのが、ミスマッチだった。

「救急車呼んだか？」

「う、うん」

新一は和葉が頷くのを見ると、蘭の手を握った。

「しっかりしろ、蘭！」

蘭が薄く目を開けた。

揺ら揺らしていて、焦点が合わない。

「蘭！大丈夫か！？」

それでも声をかける新一に、なんとか蘭は目を向けた。

「…ん…い、ち…」

声を絞り出し、何か伝えようとしている。

「どうした？」

「く…る、し…」

そう言うと、喉元を手で押さえた。

志保が脈拍を測る。

「もうすぐ、救急車来るからな！安心しろ！」

新一が言うと、蘭は目を閉じた。

「脈が速いわ…」

「博士に車を出してもらった方が…」
「いないわよ」

「そうか…ああ、クソッ」

新一は髪をぐしゃっとさせる。

「工藤くん、苛々しないでくれる？」

「だ、だからって…」

「静かにして！」

「…はい」

志保は再び蘭に目を向けた。

蘭の蒼白い顔を見ながら、自分の悪い予感が当たってしまった、と感じた。

ごめん…

心の中で、蘭に謝罪する。

自分がそう思ったから、彼女は本当に、こうなってしまったのかも
しれない。

そう思うと、自分が酷く恨めしい。

「…志保さん？」

和葉が志保の肩に手をおいた。

「顔色悪いで？あたし、代った方がええかな」

「いえ…。平気よ」

志保は首を振って、今の考えを追い出した。

今は彼女の応急処置に専念しなければ。

犯人を追及するのは、その後だ…。

救急車のサイレンが聞こえたのは、その十分後。

その日のうちに、蘭は米花総合病院へ緊急入院をした。

応急処置が早かったため、母体もおなかの子も無事だった。

「ありがとな、宮野」

「当然のことをしただけよ」

礼を言った新一に、志保はさらりと返した。

「それより、なぜ彼女が青酸カリを飲まされたのか。じゃないの？」

「あ、ああ……」

二人が難しい顔をしていると、バタバタと足音がして、慌てた様子の友人たちが姿を見せた。

「新一くん、蘭は？」

と、園子がたずねた。

「今はねてる。面会は出来ねえって」

「何があつたんだよ？」

快斗がいつになく真面目な顔で言った。

「わからねえ。だけど……」

「どこかに青酸カリが仕込まれとったんや。工藤んちにいた、誰かの手によつてな」

新一の言葉を受け継ぎ、平次が言った。

「でもそれやったら、あたしらも容疑者になるんやろ？」
と、和葉が表情を険しくさせる。

「あたし、蘭ちゃんを殺そう思う人なんか、知らへんもん」
「青子も」

「わ、私も…」

和葉と青子、園子が俯いた。

「さっきいた、あの向かいに住んどるねえちゃんは？」

平次がキョロキョロとあたりを見回した。

しかし、明輝の姿はない。

「弟さんがもう寝る時間だし、自分も少し冷静になりたいからって
言って、帰ったわ」

そう志保が答えると、快斗は妙だな、と呟いた。

「友だちが毒を飲まされたつてのに、すぐ帰っちまったのかよ」
「快斗、明輝ちゃんのこと疑ってるの？」

青子は目を見開いた。

「何だよ！」

「せやせや！明輝ちゃんがなんで蘭ちゃん殺さなアカンの！」

女子二人の勢いに、快斗は圧倒されつつも手を振った。

「そ、そういうことじゃねえよ。ただ、ちょっとおかしいなーと…」
「でも確か、明輝ちゃんて、新一くんのファンじゃなかったっけ？」

園子の一言で、平次がなるほどと言った。

「そんなら、話はあうで。あの姉ちゃんが工藤とねえちゃんの関係壊したる思うて、ねえちゃんに毒を盛った、っちゅうことやろ」

その時、新一の携帯電話が鳴った。

「はい、工藤です」

新一は少し全員から離れると、電話に出た。

そこから、お馴染みの刑事の声が聞こえてくる。

『工藤くん。この料理は、蘭さんが作ったものなのかい？』

「いえ。違いますよ、高木刑事」

『そうか、やっぱり…』

高木がため息をついたのがわかった。

「料理ですか？」

『そうみただよ。それも、蘭さんのシチューにだけね。犯人としては、蘭さんしか殺す気はなかったみたいだよ』

「そうですか…」

『それで、料理を作った人は…』

「僕の向かいの家に住んでいる、沢田明輝さんですよ。今は自宅に
いると思います」

『わかった。それじゃ、またあとでかけるよ』

「ありがとうございます」

電話を切ると、志保が何て？と聞いてきた。

「青酸カリが入っていたのは、蘭のシチューだけだったってよ」

「それ作ったの、あの明輝さんとかいう人じゃなかった？」

「そうだな…」

でも、と和葉が言った。

「明輝ちゃんやっていう証拠はないんやろ？」

「それやったら、犯人は、オレと工藤、和葉と宮野のねえちゃんの
中ってことになるで」

「いや、もう一人いんだろ」

快斗が口を挟む。

「蘭ちゃん自身だってことも、視野に入れとかないとな」

「そんなわけないじゃない！このバカいと！」

青子が怒鳴ったが、新一は何も言わなかった。

「ね、ねえ工藤くんもそう思うでしょ？」

「蘭が自分で毒を飲むなんてこと、するわけないでしょ！？」

園子も祈るような目で言うが、新一は言った。

「青酸カリが料理に入っていたとしたら、普通は味の変化で気付くはずだ。なのに蘭は全部食べた。てことは、蘭はやはり自分で毒を入れたか…」

「誰かを庇っているか…ってか」

快斗が吐き捨てるように言うと、青子が手で顔を覆った。

「なんで…」

それでも、志保は冷静さを失わないよう、務めていた。

「まだ決まったわけじゃないけど、彼女が誰かを庇っているというのも、頷けるわ…」

「蘭ちゃんは優しすぎるで…」

和葉が目には涙を浮かべた。

園子は和葉の肩に手をおいた。

「私らで突きとめよう。蘭を殺そうとした奴のこと！」

「青子も！青子だって、犯人捕まえてやりたい！」

三人が力強く頷いた。

「志保さんやって、そうやる？」

「…当たり前でしょ」

そう言うと、志保もその中に加わった。

「さあ、何が何でも蘭に毒をもった犯人を捕まえるわよ！！」

園子がぐつと拳を握った。

女子たちが一致団結しているのを見ながら、新一は考え込んでいる様子だった。

「工藤」

「大丈夫かよ」

平次と快斗が声をかけるも、聞いていないようだ。

「なあ」

突然新一は言った。

「今何時だ？」

「は？」

「何言つてんのや、工藤」

二人が聞き返すも、新一は鋭い口調でもう一度たずねてきた。

「今何時だよ！？」

「よ、夜の十時半ぐらい…だろ」

快斗が驚きながらも答えると、新一は走り出した。

「お、おい、新一！？」

「わりの、オレ行く所あつから！」

そう言うと、新一は病院を飛び出した。

「な、なんや、一体…」

平次が呆然とつぶやいた。

「何かあったら私が止めるわ。あなた達は、彼女についていて！」

志保が新一の後を追った。

静かな病院内に、二人の足音だけが響き渡っていた。

新一はある家の前で止まると、肩で息をしながらもチャイムを押した。

時間ももう遅く、家主が出てくるまでも、少しかかった。

「はあゝい」

中から四十代後半の女性が出てくる。

新一と、その後ろにいる志保を見つめ、一瞬きよんとした。

「夜分にすみません。明輝さんとお話したいことが…」

「あらあ！あなた、工藤新一くんでしょう？」

女性は新一の言葉をさえぎって、甲高い声をあげた。

「明輝から話は聞いてるわあ。すつごく有名なんですよ？若いのに、立派ねえ」

「あ、あの、僕は明輝さんに…」

「それに、イケメンだしねえ。もてるんじゃないの？明矢も遊んでくれて、あなたのことが大好きになっちゃったみたいだし…」

新一はため息をついた。

志保も呆れかえって新一と目を合わせた。

どうやら、明輝の人の話を聞かない性格は、母親譲らしい。

「もうねえ、お兄ちゃんみたいなの、つてずうつと言ってるんだもの。明きもちよつと妬いてるみたいでね、家帰ってきたら、さつさと部屋に引きこもっちゃったのよお」

「さ、沢田さん。明輝さんは…」

「いつそのこと、本当にお兄ちゃんになってくれたりしないかしら？なんてね。やだあ！冗談よ。そんな顔しないで。でもちよつと考えてくれたら嬉しいかも」

もはや新一の言うことなぞ、何も聞いていない。

痺れを切らした志保が、前に進み出た。

すると、明輝の母親は、ようやく新一に連れがいることに気付いたらしい。

「あら…。そちらの美人さんは？」

「え、えつと、彼女は…」

「私達、明輝さんの大学の友人なんです。今日彼女にノートを借りっぱなしだったんで、それを返しに。明輝さん、まだ起きてらっしゃいますか？」

母親は、それなら早く言ってちょうだいよと言いながら、家の中に向かって、明輝！と叫んだ。

すぐに明輝が姿を見せた。

二人を見て、玄関に駆けてきた。

「蘭ちゃん、大丈夫なの？」

「今は病院で寝てる」

新一が答えると、明輝はホッと息をついた。

「良かった…。帰ってきちゃったけど、ずっと気がかりだったの。
で、どうしたの？」

「蘭が食ったシチューにだけ、青酸カリが入ってた」

明輝の表情が、わずかに変わった。

「それって…毒、だよな？」

「ええ。あと少しでも量が多かったら、母子ともども危険だったでしょうね」

志保が告げると、明輝の顔がこわばった。

「誰がそんなこと…」

「確認すつけど、あのシチューって、お前が作ったんだよな？」

「うん。そうだけど…」

新一の問いかけに答えてから、明輝はハッとしたように言った。

「ま、まさか、私のことを疑ってるの、工藤くん！？」

それでも、新一の表情は変わらない。

「酷いよ！私が何で、蘭ちゃんを殺すの！？友だちだもん。そんなことしないよ…」

明輝は目に涙を浮かべて訴える。

「確かに、今日のみんなのご飯は、私が作ったよ。でも毒なんていれてない。誓ってもいい」

「それじゃ、お前は本当に無関係なんだな？」

新一が念を押すようにたずねると、明輝はこくつと頷いた。

「そんならいいんだけどよ」

そう言うと、新一は背を向けた。

「ねえ工藤くん」

その新一に、明輝は声をかけた。

「犯人、捕まえてくれるよね？」

「…ああ。何が何でもな」

新一が歩き出すと、志保もそれに続いた。

「ねえ。工藤くん、上がっていかない？…あら？」

「まま、工藤くんなら、帰ったよ」

「え？そうなの？残念ねえ」

明輝の母親は、つまらなそうに口を尖らせた。

「ああいう子が息子になってくれたら、ママも嬉しいんだけどなあ」
「高望みすぎよ、ママ」

明輝は母親に向かって笑った。

しかし、その笑顔がどこか暗い光を放っていたことに、母親は気付かなかった。

入院から一週間後、蘭は普通の病棟に移った。

この回復力は、医者も目を丸くするほどだった。

「良かったね、蘭」

「もうマスク越しに話しなくてもすむわね」

蘭の乗る車椅子を押しながら、園子と志保が話しかける。

「ありがとね、二人とも」

「水臭いこと言わないの！」

園子は軽く蘭の背中を叩いた。

「ところで…あなた、本当に何も気づかなかったの？」

志保が声色を低くしてたずねた。

蘭の表情が少し暗くなった。

「う、うん…。ごめんね」

「…良いのよ、別に。怖いこと思い出させて、ごめんなさい」

せっかく元気になった蘭が目を伏せているのを見て、園子が明るい声を出した。

「そうそう！今日はね、あとで和葉ちゃんと青子ちゃんも来てくれるって！」

「わあ、ほんと？」

「うん。あ、そうだ。明輝ちゃんもって言ってた」

蘭は笑顔を見せた。

「そっか。楽しみだなあ……」

「それまで、あなたは安静にしてなきゃダメよ。さ、病室に戻るわよ」

「わかりました、宮野先生」

三人はクスクスと笑いだした。

病室に着くと、志保がドアを開けてくれた。

二人で蘭をベッドに寝かせる。

「そういえば、新一くんは？」

今さらだが、園子は言った。

「さあ。今日はまだ来てないの」

「工藤くんなら、今朝、服部くんと黒羽くんと一緒に、どこかへ出かけていったわ」

それを聞くと、園子は顔を険しくさせた。

「あの推理バカ……。自分の女房のピンチに友だちと遊び歩くなんて……」

「そんなこと言わないの。アイツ、今までずっといてくれたんだから…」

蘭が苦笑気味に言うと、志保は口角を微かにあげた。

「どつりで最近、彼の家に明かりがついていないと思った」
「帰ってもないの？」

園子が呆れたように言った。

「ここで寝泊まりしてるみたい。だけど、私が寝る前に一旦出てっちゃうから、私もよくわからないのよね」

その時、病室のドアがノックされる音がした。

「どうぞー」

蘭が答えると、和葉と青子が遠慮がちにはいつてきた。

「蘭ちゃん、もう大丈夫なん？」

和葉が小さな声でたずねた。

「うん。もう平気」

蘭が大きく頷くと、二人揃って、安堵の息をついた。

「良かったあ。心配してたんだけど、なかなか来れなくて」

青子がギョッと蘭の手を握った。

「でも安心した！思ったよりも元気そうで」

蘭は青子に微笑みかけ、青子の後ろに隠れるようにして立っていた人物に目を向けた。

「明輝ちゃん？どうしたの？」

明輝はばつが悪そうな顔をした。

「あの…なんか、どう声かけたらいいか、わかんなくって」
「何で？」

蘭が聞き返すと、明輝は目を伏せた。

「だって、蘭ちゃんが倒れたのって、私が作ったシチューが原因らしいし。それって、私の所為ってのもあるんじゃないかな…って」
「そ、そんなことないよ！」

蘭は慌てて言った。

「あれはただの事故みたいなものよ！明輝ちゃんは何にも悪くない」

明輝はパツと笑顔を作った。

「それなら良かった。内心、すごく不安だったんだ。蘭ちゃんが私のこと責めてるんじゃないか、って」
「全然！」

蘭は笑って答える。

「明矢くんは？」

「一緒に来てるよ。蘭ちゃんの所に行くのって言ったら、自分も行くって聞かないんだもん。今はジューズ買いに行かせてる」

すると、ドタドタと足音がして、明矢が飛び込んできた。

「お姉ちゃん、お金！」

「えっ？あ、ごめん。渡してなかったね…」

明輝は慌てて明矢にお金を渡す。

「ね、明矢。お姉ちゃんたちお話あるから、皆の分も買って来れる？」

明矢は首を横に振った。

「そんなにいっぱい持てないよ」

「そ、そっか…。しょうがない。私行ってくるね」

明輝はそういうと、財布を片手に病室を出た。

「慌てん坊やね、明輝ちゃん」

和葉はクスツと笑った。

「でもお姉ちゃん、茶髪のお姉ちゃんのこと、慌てん坊さんって言うてたよ！」

明矢は園子を指差して言った。

「えっ？わ、私？」

園子はきよとした。

「へー。そんなこと言ってたんだ。じゃあさ、青子のこととは何か言ってた？」

「んっとね、少し子供っぽそうだけど、可愛い人って言ってた」

青子はそれを聞くと、微妙な顔をした。

「やっぱ子供…」

「そんなら、あたしは？」

和葉は自分を指差した。

「色が白くて、ポニーテールが似合う子だって！」

「それじゃあ志保は？」

園子が志保の代わりに言った。

「くーるびゅーていー？だった気がする」

「私は？」

蘭がたずねると、明矢は腕を組んだ。

「えーつとねえ、確か…」

しばらく唸っていたが、やがて言った。

「アンパンマン！」

「え…？」

蘭が目を点にさせる。

「あ、アンパンマン？」

園子は笑いを堪えていた。

いや、この一文だけでは意味がわからないだろう。

しかし、彼女が今見ている光景を目の当たりにすれば、誰だって笑い転げるに違いない。

「おい工藤…いつまでそうやってるつもりや？」

平次がたずねても、新一は答えない。

目の前のものに、すっかり集中している。

「おい、新一」

快斗は呼びかけたが、それにも反応を示さない。

もう限界だった。

園子が噴き出しそうになるとほぼ同時に、工藤邸のチャイムが鳴った。

「わ、私出るわね」

逃げるように立ち上がると、玄関へと向かった。

「はい？」

「あ、園子ちゃん！」

明輝は手にパックのようなものを持って、手を振った。

「明輝ちゃん、どうしたの？」

「これ…工藤くん。蘭ちゃんがいらないから、あんまりまともなものを食べてないかもと思って。今は何してるの？」

それを聞かれると弱い。

再び笑い出しそうになるのを堪えて、園子は言った。

「新くんなら、リビングでアンパンマン見てるわ…」

「…はあ？」

「工藤、オレら今いくつやと思う?」

「二十歳だぜ、二十歳!それに既婚者、お前はもうすぐ一児の父親!」

「そんな歳になって、なんでア…アンパンマン…」

ついに限界に達したのか、平次と快斗も爆笑しはじめた。

「うつせーな!誰も好き好んで観てるわけじゃねーよ!」

「へー。それじゃなんで?」

「そ、それはその…」

口ごもる新一を、二人はさらに笑う。

「観終わったのー?アンパンマン」

「園子!てめえまで」

新一が何か言おうとしたところを、明輝が割って入った。

「はいはい、喧嘩しないの。いいじゃない、たまにはさ。大学生が子供向けアニメ観たって」

平次と快斗は余計に笑った。

「大体、なんでアンパンマン？」

「明矢くんが、明輝ちゃんが蘭のことを、アンパンマンだって言ってたって聞いて…」

「へ…？」

園子からの説明に、明輝は目をキョトンとさせた。

「私が蘭ちゃんを、アンパンマンだって言ったの？」

「って、聞いたけど…違うの？」

これには明輝も笑いだす。

「何の冗談よ、それ！なんで蘭ちゃんがアンパンマンなのよ」

「でも明矢くんが…」

「工藤くん、アンパンマンが見たいからって、そんな手の込んだ嘘考えたわけ？」

新一が慌てて反論しようとしたが、明輝は続けた。

「明矢が確かに言いそうだけど、蘭ちゃんが…ア、アンパンマンって…」

堪えきれずに、再び笑った。

「それじゃ、この間明矢くんが言ってたのはなんなのよ…」

「さあね。でも私が蘭ちゃんに対していったのはじゃ…」

「じゃ？」

園子が聞き返すと、明輝は齒切れが悪くなった。

「じゃ…じゃ…じゃあねー！」

そう叫ぶと、明輝は逃げるかのように飛び出した。

「じゃって何よ…」

次の日から、明輝は姿を見せなくなつた。

園子や志保が怪しいという中、和葉と青子、そして蘭は彼女を庇っていた。

「じゃあ、何で急に来なくなつちやつたのよ！」

「園子。明輝ちゃんだって、いろいろ事情があるでしょ？」

「その事情つてのは何！？」

病院ということを知つてか知らずか、園子は大声を出す。

「この間だって、なんか言いかけてから、顔色変えて出てつちやつてさ。絶対何か隠してるわよ、あの子」

「せやつたら、その隠し事は何なん？」

「そうだよ！証拠もないのに疑うなんて、可哀想じゃない」

「だったら蘭は？殺されそうになつたのよ！？」

段々と熱を増していく言い争いを見て、志保が冷静に言った。

「確かに、現時点では誰が犯人かはわからない。でも彼女が何かを隠しているという推理は、当たつてると思うわね」

園子がほら見ろ、というような顔をした。

「最近、彼女と顔を合わせても、何も言わずに引っ込んじゃうのよ。まるで、私に何かを聞かれるのを恐れているみたいだわ」

「そういえば、この間…」

青子が顎に指をあてた。

「工藤くんちに行った時、明輝ちゃんに会ったんだけど、青子が話しかけても、答えてくれなかった…」

「あ、あたしもや…」

和葉が小さな声で言うと、蘭は俯いた。

「ただの偶然よ、きっと」

「蘭！」

「だって、明輝ちゃんが何で私を襲うの？おかしいじゃない…」

そう言うと、蘭は耳を塞いだ。

聞きたくない。

その姿は、そう語っていた。

「あ、あの…蘭」

園子が何か言おうと口を開いたが、志保に止められた。

「昨日、工藤くんのお母さんが、あなた達の子供に大量の子供服を送ってきたんですって」

突然、関係のない話を始める。

「明日持ってくるわ。楽しみにしてて」

「あ…う、うん」

蘭も戸惑いながら、頷いた。

「それじゃ、私達はもう帰るわね」

そう言つて、志保は病室を出た。

園子と和葉と青子もそれに続いたが、怪訝そうな顔をしていた。

「どうしたのよ、いきなり子供服の話なんて…」

「今は犯人の方が優先やる！」

「そんな呑気なこと言つてらんないよ！」

「静かにして！」

志保が一喝すると、三人は水を打ったかのように静まり返る。

「彼女の気持ちも考えて。ただでさえショックを受けているのに、その犯人が友だちで、おまけに頼りの工藤くんは今も家で…」

最後の言葉を濁す。

「そうね…」

園子はため息をついた。

「あたしら、自分たちのことしか、考えてへんかったのかもな」
「青子も…」

和葉と青子も、目を下に向けている。

「とりあえず、帰りましょう。明日持ってくる、子供服をまとめなくちゃいけないし」

まさかとは思っていたが…。

志保はさすがに呆れかえった。

「ま、まだ観とつたん…?」

和葉が頬をひきつらせた。

大学生三人が、揃いも揃ってアンパンマンを見ていたら、誰でもそんな表情をするだろう。

自分もきつと、同じ顔をしているに違いない。

「アンタたち…飽きないの?」

園子が試しに聞いてみたが、誰も答えない。

「平次、アンタまで何してんのん!？」

「快斗もよ!」

自分の旦那を冷静に叱りつけているが、平次も快斗もあまり聞いていないらしい。

「じゃかあしい!!今集中してんのや!」

「はあ!？」

平次の発言に、和葉はもう怒る気もなくす。

「じゃ、から始まる単語を探してんだよ!」

「な、なんで?」

快斗に言われ、目を点にする青子。

「明輝ちゃんが言ってただろ。“私が蘭ちゃんに言ったのはじゃ…”って」

「それで、三人でこれ見てたわけ？」

志保の言葉に、三人は頷いた。

「あっきた」

園子は額に手をやった。

「そんなのいっぱいありすぎて、わかりっこないよ」

「さ、そりやどうか」

快斗は青子に、メモを見せた。

「な…何これ？」

「明矢くんが言ってたんだろ。蘭ちゃんはアンパンマンだって」

「そうだけど…」

つまり、と新一が言った。

「どれかのキャラクターが、アンパンマンを、じゃから始まる言葉で呼んでたのかもしれないだろ。それだったら、探すのは簡単だ」

平次がメモを指差した。

「登場キャラクターが、それぞれアンパンマンをどう呼んどったの

か、ここに書いてみたんやけど、大体はそのまんまやった」
「じゃあ、結局わかってないわけ？」

志保がメモを一瞥するまでもなく聞くと、新一は苦笑した。

「お前なあ…これでも結構粘って…」

すると、そこで言葉を止めた。

「どないしたん？」

「しっ」

声をかけた和葉に、新一は指をたてた。

再び三人が、画面に注目する。

しばらくすると、顔を見合わせた。

「意外と普通だったな」

「せやな」

「こんな事も聞き逃してたのかよ」

そう言つて脱力する三人に、園子がで？と切り出す。

「何なのよ、一体？」

「よく聞いときゃわかるよ」

新一がりモコンを手にし、数秒巻き戻した。

「…あ…」

全員が呆気にとられて、画面を凝視してしまった。

「こういうことだったんだよ」

新一はそう言うと、テレビを消した。

しかし、志保の耳には、まだその言葉が残っているような気分だった。

『お邪魔虫』

Happy 18 (後書き)

最終的には、アンパンマンはそこまで関係ありません。――<

失礼いたしました。

沈黙を破ったのは志保だった。

「…で？」

腕を組み、新一を見下ろす。

「お邪魔虫。それが何？」

「志保ちゃん、明輝ちゃんは、蘭ちゃんを邪魔やっていったんよ？」

和葉が悔しそうに唇を噛みしめた。

「青子達、騙されてたの…？」

青子が信じられないというように、手で顔を覆った。

園子は拳を握りしめると、恐ろしい形相で立ち上がる。

「何やってるの？」

「決まってんでしょ」

園子は志保を鋭い目で見た。

「あの女狐を退治してやる！」

「あ、あたしも行く！」

「青子も！」

闘志を燃やす三人に対し、男性陣は冷静だった。

「新一君、何やってんのよ！早く行くわよ」

「オレは行かねえよ」

「何だよ！？」

「それで証拠になると思ってたのか？」

園子は言葉に詰まる。

さらに平次も言った。

「あの姉ちゃんのことや。弟はまだ子供やかからとか、泣き叫ぶとかして認めへんで」

「だ…だって…」

段々と園子の目に、涙がたまってくる。

「新一君はそれでいいの？蘭を殺そうとした奴が、こんなにも近くにもいるのに…。それで本当に耐えられんの！？」

「落ち着けて」

快斗がポンとバラの花束を出した。

「そんな怖い顔は似合いませんよ、お嬢さん」

しかし、今はそんなマジックやセリフに惑わされている場合ではない。

園子はバラをはらいのけると、なおも怒鳴り続けた。

「いくら止めても、私はあの女を許さないわよ！新一君が許しても、私はぜーったい…」
「誰が許すって？」

新一は肩に堕ちてきたバラの花びらをはらうと、静かに言った。

「証拠がねえんなら、こっちがぼろを出すように仕向けりゃいいだけの話だろ」
「せやな」

平次がニヤリとした。

「ここはオレらに任せとき。絶対に尻尾つかんだるわ」
「ほ、ホンマ？」

和葉が平次を見つめると、平次は頷いた。

「オレらが組めば、こんな事件ちよろいもんだろ」
「快斗は探偵じゃないじゃん」
「ここにいる探偵よりも、IQはずっと高いんだよ」

快斗が自信ありげな表情をする。

青子は疑り深そうな目で見ていた。

「それじゃ、お前らは蘭のところに…」
「嫌よ！」

新一を遮り、志保が言った。

「何で私たちが、大人しくあなた達のいいなりにならなきゃいけないのよ。私達だって、犯人を捕まえてやりたいんだから」

他の三人も同意を示す。

「蘭の傍にもいたいけど、蘭を殺そうとした奴を懲らしめたいのよ！だって、だって私達、蘭の親友なんだもん…」

園子が涙ながらに訴えると、さすがの名探偵と大怪盗も戸惑う。

「…勝手にしろ」

新一が渋々言った。

「そのかわり、足手纏いにはなんなよ」と快斗。

「もしそうだったら、ここでお留守番してもらって」

平次が最後に言うと、三人は手を取り合って喜んだ。

「これで良かったのよ」

志保はそつと新一に告げた。

「お前…何考えてんだよ」

「何のことかしら？」

「いつもだつたらよー…“ダメよ、危ないからやめなさい”とかいうくせに」

「あら…いいじゃない」

志保は三人を見やった。

「大勢いれば、気付きにくいことも気づけるし、今回の敵は女の子。男の子よりも、女の子の方が戦いやすいもの」

「あつそ…」

「それに…」

「あん？」

「あれ、いい加減に片付けなさい」

新一は志保が指差した方を向いた。

「あ、あれは別に…」

「あなた、彼女がいなければ本当に何もできないのね」

自分の母親が送りつけてきた子供服の山を前に、ぐうの音も出ない。

「さっさと解決して、とつとと退院してもらわないとね」

「ヘイヘイ…」

本当にこれで良かったのだろうか…。

新一はばれないようにため息をついた。

Happy 20

パンパンに膨らんだ紙袋を見て、蘭は苦笑した。

「こんなにたくさん？」

「そうよ」

志保はそう言っで、中から一つ取りだす。

小さくて軽い洋服は、窓から入ってくる風でふわっと揺れた。

「これ全部、新一のお母さんが？」

蘭はそれを受け取りながら言った。

「おととい突然届いたんよ。見てみ。男の子のも女の子の子のも混ぜてんで」

和葉は笑いながら二つの服を並べた。

確かに、男児用と女児用がある。

「まだどっちかもわかんないんだもんね。意外とせつかちだね、工藤君のお母さん」

青子はクスッと笑った。

蘭も微笑むと、そっとお腹に手をやった。

「産まれてくるのはどっちかな」

「女の子だったら、良妻賢母で空手の達人。男の子だったら、頭脳明晰のホームズ気取りってところかしら」

園子が冗談半分に言うと、全員が笑い声をあげた。

「でも新一に似るのは困るなあ」

「どうして？」

青子が不思議そうにたずねると、蘭は複雑な顔をした。

「子供まで推理オタクになって、行方不明になっても困るし……」

「それなら大丈夫でしょ。新一君の背中を見て育つんだから」

園子がニヤニヤとする。

「あの父親を見てたら、余計なことには首を突っ込まない方がいいって思うわよ」

「そうね。でもまあ、ホームズオタクは免れないかもね」

志保がそう言っ、蘭にもう一着手渡す。

「それ、可愛いと思わない？」

「うん。いいね」

子供服をたたむ蘭の横顔が、一瞬母親の顔になった。

「そっいえば、明輝ちゃんは？最初の時以来、一度も来てないんだけど……」

蘭が急にたずねると、皆押し黙った。

誰もが言いにくそうに顔を見合わせている。

「あ、あの…明輝ちゃんはな…」
「どうしたの？」

和葉は一瞬開きかけた口を、また閉じた。

「や、やっぱりええわ…」

言えるわけではない。

目の前にいる彼女は、明輝のことをこれっぽっちの疑いもなく信じているというのに…。

「変なの、皆そろって」

そう言っただけで蘭は笑うが、他に誰も笑わないのを見て、表情を固めた。

「…何かあったの？」

「な、何でもないよ」

「でも、様子がおかしいし…」

園子は俯いた。

「ほんとに、何でもないから…」

声を絞り出すように言葉を出した。

すると、蘭も「そう…？」と返した。

沈黙が訪れ、誰もが目を伏せた。

それに耐えられなくなったのか、和葉と青子が園子と志保を見た。

「私、これから博士と出かけなくちゃいけないから。悪いけど帰るわね」

そう言っただけで志保が立ち上がると、それに便乗して園子と和葉と青子も腰をあげた。

「また明日、来るからね」

最後に園子がドアをくぐる。

「園子」

蘭がそれを引き止めた。

「何？」

「私、平気だからね」

「え？」

園子は蘭を見た。

蘭は少しだけ微笑んだ。

Happy 21

園子は大学近くのカフェで、ため息をついた。

「あなたがため息なんて、珍しいわね」

「私にだって、悩みぐらいあんのよ」

涼しい顔でコーヒーを飲む志保を、園子は軽く睨んだ。

「それで、話って？」

志保はカップを置き、まっすぐに園子を見た。

「わざわざ授業の合間に呼び出したんだから、急なことなんでしょう？」

「…蘭のことなんだけど」

微かに志保の眉が動いた。

「彼女がどうかしたの？」

「昨日、病院行ったときにさ、最後に言われたんだよね。『私なら平気』って」

園子はぼそぼそと言った。

「もしかして、蘭にはわかってるんじゃないかな。明輝ちゃんが自分に毒を盛ったかもしれないって」

「…そう」

志保は窓の外を見つめた。

「でも、気のせいってこともあるわ」

「うん。けどさ、苦しくなっちゃって…。親友に嘘ついて、誤魔化して…。ほんとのこと、言ってあげたいけど…」

「本当のことを知って苦しむのは、彼女よ」

「わかってるよ。私だって、こんなに…」

そう言っていると、園子は俯いた。

「まさか明輝さんに直接話すわけにはいかないわよね」

「そりゃ…まあ」

「けど、向こうから現れてくれたみたいだわ…」

志保の視線の先には、こちらに向かって足早にくる、明輝の姿があった。

明輝はカフェのドアをくぐると、まっすぐにここへ来た。

「一緒にいい？」

気まずそうな顔をしながら、園子の隣をさす。

「どうぞ」

志保が返すと、明期はそこへ座った。

「あの、蘭ちゃんの具合、どう？」

園子は怒りを感じた。

「心配なら、自分の目で確かめれば？」

つい声が尖る。

明輝が驚いたように園子を見た。

「園子ちゃん、なんか、怒ってる？」

「別に」

答えながら、少し距離をとる。

近くにいたくない。

こんな人の隣だなんて…。

「最近来ないから、蘭が寂しがってたわ。何故行ってあげないの？」

志保がいつもよりも穏やかな口調でたずねる。

「だって…私の所為だし…」

明輝は小さく呟くと、唇を噛んだ。

園子はそれを睨んだ。

可哀想ぶってんじゃないわよ。

そつ、全部全部、アンタの所為…。

「園子ちゃん？」

明輝が怯えたような声を出した。

園子の手が、怒りで震えていたからかもしれない。

「どうしたの？大丈夫？」

「…大丈夫？」

限界だった。

「何よそれ！蘭にあんなことしておいて、よくそんなこと言えるわね！！」

園子は目に涙を浮かべながら怒鳴りつけた。

「園子ちゃん…？」

「アンタなんか、私たちの友達じゃない！蘭を殺そうとするなんて、アンタ最低よ！」

明輝の目が大きく見開いた。

「わ、私を疑ってんの？なんで…」

志保が止めようとしたが、もう遅かった。

「何でじゃないわよ！アンタ、蘭が邪魔だつて明矢くんに言ったんでしょ！？蘭が邪魔だから、蘭に毒を盛ったんでしょ！！」

叫びながら、悔し涙が流れてきた。

何で私たちは、こんな人と友だちになってしまったんだろう。

どうして…

どうして…

「ち、違うよ、私じゃない！」

「うるさい！アンタなんか、人殺しと一緒によ！最低！！」

最後にそう言っていると、園子はカフェを飛び出した。

「園子ちゃん！」

明輝が慌てて追いかけてようとしたが、志保がそれを止めた。

すると、明輝は志保の腕を掴んだ。

「し、志保ちゃん、私じゃないんだよ？ほんとだよ？」

「その言葉、蘭の前で言える？」

明輝が呆然として志保の腕を放した。

志保はそのまま振り向くことなく、園子を追った。

しばらくの間、お互いに無言で歩いていた。

話すことなどない。

今はそれどころじゃないのだから。

しかし、園子の気持ちとは裏腹に、志保は歩を止めると声をかけてきた。

「あそこまで言う必要はなかったと思うわ」

「…何それ？」

園子は志保を睨んだ。

「志保、あの人の味方すんの？」

「そうはいつてないわ。ただ、あんなに言って逃げられたらどうするのよ。意味がないでしょ」

「そうだけど…」

じゃあ、どうすればよかったのだろう。

親友を殺そうとした人を前にして、どういう態度でいればよかったのか。

「工藤君だって我慢してるの。あなたの気持ちもわかるけど、少しは抑えなさい」

「アンタは蘭と知り合って短いから、そんなことが言えるのよ…。」
志保に何がわかんのか？」

いつてからハツとした。

「うん、ごめん…」

「いえ…その通りかもしれないわね」

志保が息を吐いた。

「確かに私は、あなた達と出会ってから日は長くない。だから、私にはわからないこともたくさんあるわ。でも、彼女が大切なのは、皆と同じ」

「うん…」

「…帰りましょうか」

再び無言で歩きだす。

だが今は、互いが考えていることが分かる。

思いはひとつだ。

蘭を傷つけた人物を、許すことはできない。

新一は、平次と快斗と共に疲労していた。

「次はどうしろっつーんだよ」

「お前、IQオレらより高いんとちゃうんか？」

「こつというのは専門外だよ。後は任せた」

快斗はそう言つて、ソファに身を預けた。

「何だよ、これ…。成績優秀、家族思い、明るく優しくしっかり者。悪いところなんて一切無しの真面目タイプ…」

新一はまとめた資料を見ながら苦笑した。

「そこまで完璧な人間がいるとは、オレも知らなかったわ」

「バ―ロ。完璧な人間なんているかつつーの」

新一は資料を投げだすと、ため息をついた。

「何の手がかりもねえじゃねか…」

小さく漏らすと、平次も頷いた。

「せやな…。もうこの姉ちゃん、犯人やあらへんのやないか？」
「じゃあ真犯人誰だよ」

快斗が上を向いたままたずねてきた。

「オレが聞きてえよ、つたく…」

新一は髪をぐしゃぐしゃとさせた。

「さすがの名探偵二人もお手上げか？」
「アホ。こんなんで降参するほど、オレは甘くないわ」

その時、工藤邸にチャイムの音が響いた。

新一はさも面倒そうに立ち上がり、玄関へ向かった。

「はい？」

ドアを開けると、一人の少女がいきなり新一の腕を掴んだ。

「な、なんだよ？」

「お願い、工藤君！」

少女は大声をあげた。

その声に、平次と快斗もやってくる。

二人は新一にしがみつく明輝の姿を見ると、慌てて走り寄ってきた。

「どうしたんだよ」

「ねえちゃん、何やってんねん？」

明輝は顔をあげた。

涙でぐじょぐじょになっている。

しかし、まっすぐに新一を見ると、泣きながら言った。

「弟を…明矢を助けて！」

「あ、明矢？」

新一が聞き返すと、明輝はさらに涙を流しながら叫んだ。

「明矢を探して！突然いなくなっちゃったの！」

新一、平次、快斗の三人は、すでに暗くなりかけた住宅街を走りまわっていた。

「明矢ー！」

「どこやー？」

「出てこーい！」

もうかれこれ三十分は探している。

しかし、明矢は一向に見当たらない。

「あの坊主、どこ行きよったんや」

平次は膝に手をついて息を整えた。

そこへ、明輝が硬い表情のまま現れた。

「工藤君、いた？」

「いや、見つからねえ」

明輝は両手で顔を覆った。

「どうしよう…私の所為だ…」

「何かあったのか？」

快斗がたずねると、明輝はぼそぼそと話し出した。

「さっき、大学から帰って、明矢と喧嘩したの…」

「ただいま…」

「お姉ちゃん、お帰り！」

明矢がひよこつと顔を覗かせた。

「ねえねえ、僕、お向かいのお姉ちゃんどこ行きたい！」
「え？…あ、ああ、蘭ちゃんね。今日はダメよ」

明輝がそう言うと、明矢は面白くなさそうに膨れた。

「何で？」

「蘭ちゃんは今ね、体の具合が悪いのよ。明矢が行って、余計に悪くなったらどうするの？」

いつもだったら、これで引き下がるはずだった。

しかし、今日の明矢は頑固だった。

「やだやだ！行きたいよ！」

「我儘言わないの」

「行くったら行く！絶対に行く！」

「明矢！！」

思わず声を荒げた。

明矢がビクツとして身を縮めた。

「お姉ちゃんを困らせないで！今日は行きません。わかった？」

「でも…」

「でもないの！それ以上言うなら、お家から出しちゃうよ！」

「それなら…明矢は、蘭の所に行ったんじゃないのか？」

話を聞き終えると、新一は行つたが、明輝は首を横に振つた。

「私もそう思って、病院に行つただけど…看護師さんに聞いても来てないっていうし」

「ねえちゃんは何か言つてたんか？」

平次が聞くと、明輝は俯いた。

「蘭ちゃんの所には、行つてないの」

「何でや？」

「ちよつと…行きにくくて」

腕が小刻みに震えている。

「でも看護師さんが来てないって言ってるんだし、きっと行つてないわ。あの子が病院に一人で行けるわけないし。その辺でめそめそしてるんだわ」

「それなら、手分けして近くの公園でも回るか」

快斗の言葉に、新一と平次は頷くと、三人は別方向に走り出した。

「わ、私も！」

明輝は慌てて、新一の後を追った。

「お前の弟がよく行く場所ってあるか？」

「え、えつと…こつち！」

明輝は路地を右に曲がると、新一の前を走った。

「どこに向かつてんだ？」

「杯戸中央公園！」

そう言うと、明輝はさらにスピードをあげた。

杯戸中央公園には人気はなく、先程まで人が乗っていたらしいブランコが、少しだけ揺れていた。

「いつもは、滑り台の上で泣いてるのよ」

しかし、滑り台どころか、公園自体に人がいない。

「おかしいなあ…」

明輝は辺りを見回しはじめた。

しばらくして、新一は思っていたことを口に出した。

「明矢が行方不明って、嘘だろ？」

明輝の肩が、一瞬ピクリと動いた。

「弟が行方不明になったら、普通は警察に届けるのが先だろうしな。それに、行き先がわかってんなら、オレ達をわざわざ頼る必要もねえし。さっきの喧嘩の話は本当だとしても、明矢は家にいるんじゃないのか？」

「な…何でそんな嘘を…」

「全ては、服部と黒羽をオレから遠ざけるため」

新一の静かな声が、やけにあたりに響く。

「お前が犯人なんだろう？」

冷静でいようと、新一は声を抑えた。

「お前が、蘭を殺そうとしたんだろう？」

明輝は無言のまま。

「答える！！」

明輝がゆっくりと、振り返った。

明輝はゆっくり振り返った。

「…そうだよ」

落ち着いた、静かな声だった。

「あの女に毒を持ったのはこの私。これでいい？満足？」
「てめえ…」

新一は怒りをぐつとこらえた。

「何でそんなことをしたんだよ」

すると、明輝は笑った。

その目には、光がなかった。

「だって彼女、ウザいし？」

きやははと笑い声をあげた。

「う、ウザいってお前…」

「目障りだったのよ。だから殺そうとした。ま、量を間違えて未遂に終わっちゃったけど」

明輝は退屈そうに髪の毛を指で弄んだ。

「蘭と友だちじゃなかったのかよ？」

「はあ？何言ってるの？私とあの女が？気色悪い」

明輝はそつと新一に近付いた。

新一の頬に手をあてると、囁くように言った。

「私はね、ずっと長女として、姉として、あらゆることを我慢してきたわ。友達と遊ぶことなくバイトをして、必死で勉強して、弟の世話もして…。明矢が小学生に上がって、ようやく私にも微かな自由が与えられた。もうこれからは、何も我慢しない、そう決めてた。でも…」

明輝は語気を強めた。

「あの女は、それを邪魔したのよ。私の初めての自由な恋愛を、あの女が…」

「な、なんのことだよ」

新一は一步後ずさった。

しかし明輝は、距離を縮める。

「私、昔からあなたのファンだったの。だけど、この間こっちに越してきて、本当にあなたが好きになった。初恋なの。今までだったら我慢してた。でも今は、我慢しなくてもいい。あの女さえいなければ」

「ま、待て！お前確か、蘭はオレの…」

「兄妹なんて、最初から思ってたなかった。二人とも指輪もしてたし、

夫婦だつて気付いてた。認めたくなかつただけ」

明輝の目に涙が浮かぶのが見えた。

「だつてそうでしょ？　ようやく好きな人ができたのに、その人には綺麗な奥さんがいて、自分が入る隙間もないってわかつたら…」
「だからって殺そうとしたつてのによ？」

新一は声を荒げた。

「そうよ！　殺せなくても、子供だけでもいなくなっちゃえばいいって思つただけ。そうすれば、絶対に二人は別れるって…だから…」
「生憎だな。オレは別れる気なんかさらつさらねえよ！」
「そんなのわからない！　あなたはそれでも、あの女がどうするかなんて、決まつてないもの！」

もはや理性などない。

静まり返っている公園内で、二人の声だけが響いた。

「大体、蘭を殺そうとした奴を、オレが好きになるとでも思つたか？」

「そ…それ、は…」

明輝が俯いた。

「ガキの頃から、蘭だけを見てた。アイツがオレをただの幼馴染としか思つていなかった時も、オレはアイツだけ見てきたんだ。絶対に、アイツ以外に惚れたりしねえ」

新一が断言すると、明輝はフツと笑った。

「馬鹿みたい。熱くなっちゃってさ」

「何？」

「感情なんてもろいものよ。特に恋愛ではね。今の気持ちがどんなに強くても、いつかは枯れ果ててしまうんだから」

明輝が目を細めた。

「それはお前も一緒ってことになるぜ？」

「そうね。そうかもしれないわ。でも私には、薬っていう武器があるの。忘れないで」

そう言つと、明輝は小さな瓶を取り出した。

「な、なんだよそれ…」

「ちよつとした惚れ薬よ」

瓶を振ると、中の錠剤がからからと音をたてた。

「んなもん効くかつつの」

「さあ、どうかしら？」

明輝が妖しい笑みを浮かべた。

そこへ、ガサガサと音がして、一匹の猫が現れた。

二人を見上げ、にゃーと鳴いた。

「試してみる？」

明輝は錠剤をひとつ取り出すと、猫の方へ投げた。

猫は匂いを嗅いだ後、慎重にそれを舐めた。

すると、猫は明輝の足元に擦り寄った。

「どう？それでも効かないって言える？」

猫を撫でながら、明輝は新一を見た。

「何が目的だ？」

「あなたを私のものにする」

明輝は射るような目を新一に向けた。

「ただ、それだけよ」

そう言うと、明輝は瓶を新一に投げた。

「それを飲めば、もうあの女に手を出さないわ」

「…飲まなかったら？」

「もう一度、あの女を殺しに行くわ」

新一は明輝の目を見た。

いつもの明るく元気な明輝の姿は微塵たりともない。

極めて冷静で、残虐的な目をしていた。

新一は瓶から一粒錠剤を取り出した。

「これさえ飲めば、もう蘭には近寄らねえんだろ？」
「…もちろんよ」

新一は手の中の錠剤を見つめた。

それをゆっくり、口元へ運んだ。

Happy 25

新一は口元に惚れ薬を近づけた。

確認するように、明輝を見る。

「飲まないの？」

明輝に急かされ、新一は薬を見つめて、大きく深呼吸をした。

そして…

「three…two…one！」

ポンと音がして、錠剤が紙吹雪へと変わった。

「な…何これ…」

明輝は呆然としてそれを見つめていた。

「ナイスタイミング」

呑気な声とともに、今度は鳩が飛んできた。

明輝は悲鳴をあげた。

一方新一は、片手をあげて笑っている。

「サンキュー」

「ま、これぐらいオレの手にかかりゃ、どうってことないって」

快斗鳩を手に止まらせた。

横で平次も、ニヤリとしている。

「さ、どないする、ねえちゃん？薬がこっちに渡った以上、あんたにはもう切り札はないはずやけど」

明輝はようやく我に返ったらしく、上ずった声を出した。

「な、何よ。それを飲まないんだったら、私はあの女を殺しに行くだけよ」

「これを飲む？そうしたらどうなるのかしら？」

後ろから志保が、例の錠剤をつまみながらたずねてきた。

「決まってるでしょ。それは惚れ薬よ。飲めば必ず……」

「惚れ薬？これが？私にはただの、キャットフードを粉々にして薬のように見せかけた、意味のわからない代物にしか見えないわ」

これには新一も驚いた様子で、錠剤を取り返して眺めた。

「これ確か、猫が食ったよな……？」

「そりゃ食べるでしょ。猫の餌なんだから」

明輝は動揺したように、一步後ろに下がった。

「何のことかわからないわ。あの猫はそれを食べて、私によってき

たのよ？」

「それはおそろく…」

志保はチラッと後方を見た。

「ソラー！」

がさつと音がして、先程の猫が顔を覗かせた。

すると、まっすぐに自分呼んだ主、明矢のもとへ向かった。

明矢はソラを抱くと、こちらに走ってきた。

「その猫、お前のか？」

新一が訊くと、明矢はこくつと頷いた。

「ソラっていうんだよ。よくここで一人でお散歩してるの」

「…つまり、お前の猫だからお前になついていて当然だってわけか」

新一は明輝を睨んだ。

「ばれちったか」

明輝は不満げに呟いた。

「そらすぐばれるわ」

平次は呆れ半分に言った。

明輝の目に、再び涙が浮かびはじめていた。

「最初から、こうなるのはわかってたのかも…」

潤んだ目を、無理矢理こすった。

「お姉ちゃん、どうしたの？いたずらしたの？」

意味のわからない明矢は、不安そうに明輝を見上げた。

「明矢、一人でここまで来たの？」

「ううん、違うよ。お兄ちゃんとお姉ちゃんにここまで連れてきてもらったの」

「…そっか」

明輝は明矢の頭を撫でた。

「じゃあ、帰りもみんなに送ってもらうのよ」

「お姉ちゃんは？」

「…お姉ちゃんはね、ちょっと寄らなきゃいけないところがあるのよ」

「すぐ帰ってくる？」

明輝は一瞬、動きを止めた。

「いい、明矢。お姉ちゃんのお名前は、明るく輝く子。明矢は、明るくて、矢のように強い子よ。お姉ちゃんがいなくても、明矢はもう大丈夫だからね」

「お姉ちゃん？」

明矢は困惑したような目をしていた。

「明矢は強いから…パパとママを守ってね」

明輝はそう言つと、小さな弟の身体を抱き締めた。

「それじゃ、私は行くわ」

「待つて」

そつと明矢から離れる明輝に、志保は声をかけた。

「まだもう一人、会っておかなくちゃいけない人がいるわよ」

そう言つて、公園の入口に目を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6379y/>

私の幸福をあなたに

2011年12月29日23時50分発行